

私は自分が小児まひにかかったことを、いまではほとんど苦にしていけない。むしろ、おとなになってからかかると、この程度（走ることはできないが、普通の歩き方では多くの人が見逃すくらいの軽いびっこ）ですんだ、ということなどは、むしろしあわせだったと思う。しかし、一方から考えれば、この病気にかかったことも私たちは無心であるが、その母親の苦しみなやみをも自分で引き受けたことにもなつて、精神的

つたのみ日記（6）

——小児まひ、その二——

な重荷はひどいものだった、ともいえる。

おとなであつたから、外からは平静なきもちでいるように見せかけるようになるまでにはそう長くはかからなかつた。普通は全く無意識で動かして、右脚を、はっきり意識して順序をつ

けて動かすけいこをして、ある程度そのこつがわかるようになってくると、次に考えたことは、どうしたら人にびっこをひいていることを知られないように歩くか、ということであつた。さまざまに工夫をしなから、しょっちゅうそのことを気にかけていた。その反面、普通のからだの人に負けないように、といった気も張りつめていた。足が関係するような仕事は注意ぶかくはじめから避けるようにして、その外の仕事では外の人には全くひけをとらぬように、とがんばつた。

自転車に乗ることを習い覚えたのも、自分の足の不自由さを取りもどすことであつたし、水泳が好きだつたのも、水の中ではある程度足の自由もどつたような気がするからでもあつた。ダンスや、自動車の運転など、デリケートに足を使うことは、あたまから避けていた。

しかし、はっきりといつからだつたかは覚えていないが、四、五年ぐらいたつたとき、ふと自分が足が不自由であることをあまり気にしなくなつてゐるのに気付い

た。ほとんど平気で、足がわるいことを人はいえるようになったし、故意に人に知られないように努力することもしなくなつた。何か悲壯な心がけて運命に堪えるといった気持ちがあうすれて、平凡な淡々とした気持ちになつてきた。そして、そう大げさな気持ちでなしに、足のわるいのもまた、いいものだ、と考えるようになった。

足のわるいのもまたいいものだ、ということばには、まだ負け惜しみが残つているかもしれない。しかし、私はからだにこの程度の不自由さがあることによつて、まづいままで生きながらえてきた、と思うし、また、精神的な冒険についても、身のほどを知つて適度にひかえ目にすることを学んだ。私などのようなものにとつては、この程度のこととはむしろ天恵であるといつていいかもしれない。そして、お互に、どこかに少しばかりの欠陥をもち、それを自覚することが、天命を全うしたり、人並みに生きることの大きな足しになるのではなからうか、と思つたりするのである。

坂元彦太郎